
世界は勇者を中心に回ってるわけじゃない

kokoa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は勇者を中心に回ってるわけじゃない

【Nコード】

N0925P

【作者名】

k o k o a

【あらすじ】

宿屋の息子レオンは今日もまたのどかな一日をすごす・・・はずだったのだが。

あー、あつたけー。

「ふああ」とあくびを漏らす。時刻はお昼前。暖かな春の日差しが窓から入ってきて実に心地よい。

……やっぱり春っていいよね。

暖かいっていうのもあるけど、それ以上に景色がすばらしい。野山に咲く花、顔を出す生き物たち、ゆらゆらと静かに吹き渡る風。はああ……、平和だ。

このごろタチの悪い魔王やらが増えて大変なわけよ。まあ、オレに出来ることといやあ、その魔王を倒しにいく旅のお方を泊めることぐらいなものだが。この御時世とにかく大変なわけよ。

まあ、でも。この日和だとそんなことも忘れちまうよ。

えっ？ お前いきなり語り出して何様だ、お前のことなんか知りたくねえよ、マジうざいんですけどだって？ いや、オレには確かに聞こえたぞ。世界の果てから聞こえるような、そんな思いがっ！ すいません、申し遅れました。

私は、小さな村で父とともに宿屋を営む者です。歳は二十です。どうか、どうか宜しくお願い致します。

………許してくれますか？

きつと許してくれたよね？ いや、そうに違いない。世の中悪い人ばかりじゃない。オレはそう信じてますよ。

先ほど父とともに経営してるとはいつたけど、今このカウンターにいるのは、片肘ついてぼけーっとしてるオレだけなんだよねー。

実は……、実は父が寝込んでしまつて……うつ、うつ……。

すいません、調子に乗りました。そんなに深刻な話じゃないので心配はいりませんよ。末期ガンとかそういうのじゃないから、そのうちけろつと戻ってくると思う。

まあでも父もけっこう歳だから安静にはしとかないとしてことで

一人で頑張ってるわけだ。

数日やって気づいたんだがこの仕事、一人でこなすのって意外ときつい。たぶんオレが継ぐことになるんだろうけど。

オレの名前聞いてないよだって？

なんか開始早々気のきかないやつですいません。どれだけオレができない子かっということがよく伝わったことでしょう。

オレの名前はハロルド・マゼラン・レオン。さっきもいったけど、父が寝込んでいるので一人で宿屋を切盛りしている。

うるせえな！ いいだろ、ちょっとぐらい長くてもさあ！ 脇役だってなあ、ちゃんと名前だってあるし、ミドルネームもあるんだよっ！

魔王を倒す勇者ばかりが英雄じゃなんだよ。旅の疲れを癒す宿屋があつてこそその勇者だろうが！

勇者ばっかがいい名前つけられてて悔しいよ。魔王を倒した勇者の伝記とか読む限りじゃ、宿屋のあるじの名前省略されてんだろが！ 載っても呼び名だけ。オレの場合だとレオンとか。

脇役だって名前は普通に長いのっ！ 分かったか！

一人で心の中で葛藤していたオレだったが、来客を告げるベルの音で我に返った。そして来客が入って来るであろう扉の方を見た。オレはこう一言。

「いらっしやい、ま……………」

言葉を失った。

入って来た客はいかにも旅の魔法使いという格好であつた。

縦長の空色の帽子に黄色の十字架の印。顔から下は非情に説明がし難いのだが、かぶりものと同様に空色で黄色のラインが入っている。たとえるなら、下半身はロングスカートのようで足が隠れるほど長く、上半身は、それはもうがっちり強化されたような長袖の服のようであつた。これがいわゆる魔法使いの格好なのだ。

だが、言葉を失ったのは服装のせいではない。

その魔法使いは、オレの世界がまるつきり反転するほどの超綺麗

な方だったのだ！ それも超タイプ。

水を薄く切って張り付けたようにつややかなその肌。まとっている衣服よりも透き通った水色の瞳。ストレートに伸ばしたそのロングの黒髪。

美人という言葉がこれ以上あう人はいないのではないかと思うほどだ。

ああー。付き合いてー。

はじめに脳に浮かんできたのがその一言だった。

「あつ、あのー、どうかされましたか？」

透き通るようなその声。他に何色も混ざっていないような純粹な透明。

そんな声を聞いて、ふと我に返った。

「あ、いついえ！ いらっしやいませ」

や、やべー！ 目え合ってるよ、目。現在進行形で！ そんな綺麗

麗な目で見つめないでくれ！

「宿泊ですか？ 休憩ですか？」

ふう。何とか冷静にかまずに言えたぞ。こんな綺麗な子に見つめられて冷静でいられるオレは称賛にあたいるぞ。いや、冷静ではないけれども。

「休憩でお願いします」

「二〇Gゴールドになります」

くそっ！。ほんと金なんて請求したくないのにー！ もう泊まっていたただけでそれが代金がわりですよ。むしろこんな所に泊まっていただけならこちらが払いたいぐらいだわ！

そんな気持ちとは裏腹に二〇Gを差し出す魔法使いのお方。むむっ。心苦しい。

「では部屋へ案内しますね」

仕事だからしかたないか。そう割り切って次の行程に取り掛かるうとした。
が。

「ありがとうございます。でもここでいいです。ここに集まることになってるんで」

な、なんだあ！ その笑顔はっ。『キュンッ』ってなったじゃねえか『キュンッ』って。

どんだけ好感もたせる気だよ。あなたが登場してから好感度のパロメーター上がりばなしっすよ？　すでにMAXなんですけど！

「じゃ、じゃあその椅子どうぞ」

オレは一階にある唯一の家具といってもいい、大きめのテーブルとその周りに置かれた四つの椅子を示した。

その子はまた透き通るような声で「ありがとうございます」と言い、その椅子の方へ向かった。

オレから顔が見えるように座った彼女にオレは話しかけた。

「あの、名前はなんというんですか？」

やばい！　なんかナンパっぽくなっちゃった。てかよく普通に話しかけたなオレ。

「私ですか？　私はリススです」

そんなオレに笑顔で答えてくれるリスス。

くそっ、やっぱかっこいい名前じゃねーか。おそらくこの子は勇者を回復魔法とかでサポートをするポジションの子だな。その勇者が伝記になるんだとしたらこの子はフルネームで書かれるんだろな。それでオレは途中で立ち寄った宿屋のただの若者。もしくはそのシーン自体ばっさりカットとかになりかねん。

まあまだリススが勇者と旅をしてるって決まったわけじゃねーけどな。この格好からしておそらくそうだろう。

「待ち合わせしてるって話ですけどどういった相手なんです？」

うっ。なんか思ったよりいやな言い方になってしまった気がする。これじゃ遠回しに彼氏いますか？　って聞いているようにしか思えんぞ！

だがこんなもの言いにも気を悪くせず答えてくれるリスス。

「私、仲間と各地を旅をしてまわってるんです。最近、町や村をあ

らしに下りてくる魔物が増えているもので。平たくいえば旅仲間と
いったところですかね」

やはり、オレの予想はあたっていたか。まあこんな格好でただの
村の娘ですとか言われたら軽く引くしな。どんだけ美人でも。

そんな一方的な質問に区切りがついたころ、再び来客を告げるべ
ルになる。

たぶんこの子の連れなのだろう。

「いらつしゃいませ」

入って来たのは、かなりゴツい筋肉隆々の男と、少し痩せがたの
弓使いらしき男だった。その証拠に背中には弓とその矢が背負われ
ていた。

先導して入ってきた筋肉男は入って来るなり、リシスの姿を見つ
け話しかけた。

「よう！ リシス。悪いなあ、待たせちまつて」

おおっ……。想像通りの声としやべりかた。これだけ聞いただけ
でこの人は陽気な男なんだろうと予想がつく。

この男は見た目からしてファイターといったところか。ファイタ
ーというやつは接近戦を得意とする職業のことで、攻撃力に長けて
いる。

んでこっちの痩せた弓使いのほうは名前の通り、弓を使った遠距
離攻撃で仲間を援護する職業。

「いえいえ、お使いご苦労さま」

そう言つて優しく微笑むリシスこと魔法使い。

オレも「ご苦労さま」と言われてー！

これで、魔法使い、ファイター、弓使いと揃ったわけだがやっぱ
なんか足りねーよな。そう、伝記などでも主役として扱われること
も多い、一番かつこよくて目立つ職業。それだけが「勇者」とよば
れることもあるパーティーを引っ張るリーダー的存在。

そう剣士だ。

案の定やはり一人足りないようで三人はしゃべりだした。

「やっぱりあいつはまだ来てないのか？」

ファイターの男が言う。

「来てないわよ」

「あいつオレ達に買い出しさせといて、とうの本人は比較的弱い魔物を倒して経験をつんどるとききたもんだ。あいつぜってー良いところでしょうとしてるぜ。オレ達は援護役で十分ってことだろ？ あの鬼畜ナルシストやろうが！」

え、えええええええ？ 何を言うかと思えば、弓使いの兄ちゃん。開口一発何言っちゃってんの？ 鬼畜ナルシストって悪口以外の何者でもねえだろ。

「ちっ。あのタコ野郎！ そのくせダメージくらったら、私に回復しろっていうんだから、たまったもんじゃねーよ」

年頃の子が親に反抗するかのような態度で舌打ちするリスス。

た、タコ野郎だと……。しかも語尾が「じゃねーよ」だよ。

う、うそだろ……。リスス、あなたまでそんなことを。

オレの中で常にMAXを維持していたリススの好感度は、いきなり急降下し、今やマイナスに突入していた。

うーん、たとえるなら火山から急に雪山に瞬間移動した感じ？

はあ、なんか急に冷めたわ。間違っても女の子があんな言葉はいちゃ駄目だろ。うん、いくら綺麗な人でもあれは無いわ。

ていうか、もう一人の人ただけ嫌われてんだよ。ほんとに勇者なのか？ なんか不安になってきたぞ。

その後も三人は聞くにたえるような悪口やら、日頃の鬱憤などをずっと愚痴っていた。

やっぱりどんな勇者でも裏では言われてるのかねー。こんな会話聞いているとオレも怖くなってくるよ。オレも裏では言われてんのかなー。

あー、やめよやめよ。こいつらの話聞いているとこっちの気分が悪くなっちゃう。

「その、もう一人の人ってどんな人なんですか？」

ギロツ。三人の目が一気にこちらを向く。

こ、こわ！ やっぱ聞くのやめときゃよかった。でもそんなに言われる人ってどんな人なのかなって気になっちゃったんだよ。チクショー！ 好奇心にはかてねー！

「私たちのリーダーです。たよりになる剣士ですよ」

優しく答えてくれるリスス。

はい、うそ！ 絶対、うそ！ さっきまで愚痴ってたくせに何言ってるの。しかもしゃべりかた元に戻ってるしっ。

オレの表情を読みとってか、リススは小鳥のように首をかしげた。頭の上に？マークでも出そうな表情だ。

騙されんぞ。そのかわいい顔の裏に隠してんだろ？ 本当はオレがなんでこんな表情かも分かってんだろ！ けっ。白々しい。

オレはひとしきり突っ込んでから、再びぼけーとし始めた。

魔法使い、ファイター、弓使い、そして剣士。どつかで聞いたことあるんだよなこの組み合わせ。はて、どこだったかしら？

そんなことをオレが考えているうちにも、この三人はまだもう一人の仲間の愚痴を言っていた。それも最初よりも勢いが増しているように感じるのはオレだけだろうか。

どんだけ嫌いなんだよこいつら。そろそろ悪口つきてきてもいいころだろ。

その時今日三度目の来客を告げるベルがなった。

あの男の登場だ。自分の知らないところで散々愚痴られた可哀想な男だよ。

きっとこの先も知ることはないだろう。知らずにリーダーとしてやっていくのだろう。裏ではリーダーと思われて無いのに、自分は張り切ってリーダーを努める。なんて可哀想なことだろうか。

オレは複雑な心境で一言。

「いらつしゃい、ま……………」

オレはあの時のように言葉を失った。

入って来た男は予想通り剣士の男だった。

全身がっちりと堅められた銅の防具で、背中には重そうな大きめの剣を背負っている。

かつ、かつこいい。

茶色に染めた長い髪に整った顔立ち。男のオレが見てかつこいいと思うのだからそうとうかつこいい。

でも、顔と性格は別物だしな。それはさっきの出来事でよく学んだよ。

さあ、あの三人はどうだ。罵倒か、悪口か、それとも無視なのか。
「ヘイト、魔物退治お疲れさま！」

「おおつ。傷一つ無いところを見ると余裕だったのか」
「買ってきたパンあるけど食べるか？」

えっ……。何この変わりよう。こわっ！

リシスおもしろいしゃべりかた元に帰ってんじゃない。それにどうした、弓使いの兄ちゃん。何が「パンあるけど食べるか？」だよ！ さっきは鬼畜ナルシストとか言ってたくせに何ころつと態度変えてんの？

あー、なんか色んなことずつ飛ばしてすごいわ。本当に尊敬にたいするね。逆にここまでくるとすがしいよ。

「ありがとう。でもいいよ。次に行かなきゃいけないところもあるしね」

イケメン剣士ヘイトは爽やかにそう言う。

「じゃあ、ちよつとぐらい安んでからでも……」

リシスは例の透き通るような声で言った。

「いや、行こう。わがママを言ったぶんおまえらに迷惑はかけられない。オレのことは気にするなまたまだ体力は有り余ってる」

この人、もしかしてすごい良い人なんじゃないの？ あの三人も態度を変えたとかじゃなく本当はすごくリーダーとして頼りにしているのかもしれない。

三人はヘイトの言葉を聞いて席を立った。

本当に嫌いならこんなに嬉しそうに立ち上がらないよね。仲間だからこそ思うところも少しはあるのかもしれない。でもそれに勝る良いところがあるから一緒にいるんじゃないの？ オレはそう思うのである。

ヘイト率いるいつこうはもう扉を出ようとしていた。

……あつ！ 思い出した。

魔法使い、ファイター、弓使い、剣士。何か聞いたことがあると思っただら……。

「あの！ あなたたち、雪山のウルフマンを倒した方達ですよね！？」

極北にある小さな村の近くの雪山に現れるというウルフマン。そのウルフマンを倒したという四人組の話。一人は凄腕の美人魔法使い、一人は頭脳明晰の弓使い、一人は怪力のファイター、そしてもう一人は仲間思いの勇気あふれるイケメン剣士。

その四人の活躍でその村は救われたという。

オレの言葉に反応したのか、四人は一度足を止めたが何も言わずに出ていってしまった。

彼らなら魔王を止めることができるだろう。ほんの少しでも役にたてたなら幸いだ。

もしこの宿屋が無かったらどうだろう？ 彼らは集まることができなかったかもしれない。そう考えると少しは役にたてたのかもな。

そしてその翌日。

なんと彼らが傷をおってこの宿屋に戻って来たのであった。

出血は酷かったが、そこまで傷は深くなく、復帰した父とともに怪我の手当てをしていた。

話を聞くと洞窟に巢食うドラゴンが手ごわくて敵わないとのこと
で、しばらくこの宿屋を拠点にする腹づもりらしい。

結果からいうと一ヶ月ほどでドラゴンは倒し、さらにその一年後
には魔王を倒した。

そしてその物語は伝記となり、後世に語り継がれることとなる。
それにはこうも記されていた。

キラウエア洞窟のドラゴンとの死闘の間、彼らの生活を支えた宿
屋の若者レオン。ドラゴンとの死闘において彼の存在はたいへん大
きなものであった。

と。

ははっ。やっぱりフルネームは載らなかったか。

まあ、でもこうして名前が載っただけでもえれーことだよな。脇
役を代表して載ったわけだしな。

私は、小さな村で妻とともに宿屋を営む者です。歳は七〇歳です。
脇役です。

でも、魔王を倒す勇者だけが英雄じゃない。

彼らが使っている剣や防具は武器屋で買ったものだし、彼らの腹
を満たすのは食堂だ。そして彼らが休息をとったり寝泊りをするの
は……そうここ。宿屋だ。

それらの人達は脇役とよばれるが、主役が魔王を倒すために必要
な力の根源は脇役にあるといってもいい。

いや、そうとしか言わない。断言する。

世界は勇者を始めとする主役を中心に回ってるわけじゃない。
オレ達脇役が世界を回しているのだ。

私はそう思うのである。

（後書き）

短編に初挑戦です！

まあいつでも二作目ですけどね・・・。

へたくそっと思ったら遠慮なく書いてくださーい♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0925p/>

世界は勇者を中心に回ってるわけじゃない

2010年11月24日17時55分発行